

上野輪王寺宮墓地外構塀改修その他工事に伴う立会調査



第28図 上野輪王寺宮墓地 位置図
平成11年国土地理院発行 1:100000 地形図「上野」使用

輪王寺宮は東叡山寛永寺門主と日光山輪王寺門跡を兼帯し、さらには天台座主(比叡山延暦寺)をも兼ねることが多かったことから「三山管領宮」とも呼ばれ、その墓地は、三山にゆかりの栃木県日光市山内輪王寺内、東京都台東区上野公園寛永寺両大師内、京都市山科区安朱稲荷山町毘沙門堂内の3箇所が存在する。今回工事が行われた東京・上野の宮墓地は上野台地の東端近くに所在しており、隣接する東京国立博物館以西、国立科学博物館以南の台地上一帯には旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である「上野忍岡遺跡群」が広がっている(第28図)⁽¹⁾。

当墓地内には歴代門主および後継予定者の本墓8基、髪塔や髪爪塔などの供養塔5基、寛永寺2世公海大僧正の供養塔1基の、計14基の石

塔が所在している。墓地の周囲にはコンクリート製の外構塀が巡るが、そのうち東辺の約半分と西辺のほぼ全ての部分について、老朽化が進行したために改修工事が行われることになったものである(第29図)。掘削は外構塀の基礎部分において行われ、長さおよそ1.5m、幅およそ0.8m、深さおよそ0.8～1.2mの掘削がおよそ60箇所で行われた。工期は平成20年1月22日～3月31日で、3月8日に台東区教育委員会文化財保護調査員小俣悟氏とともに現地を検分した。その際、小俣氏には様々な教示と助言を受けたほか、出土遺物についての玉稿も賜った(後掲)。記して感謝の意を表す次第である。

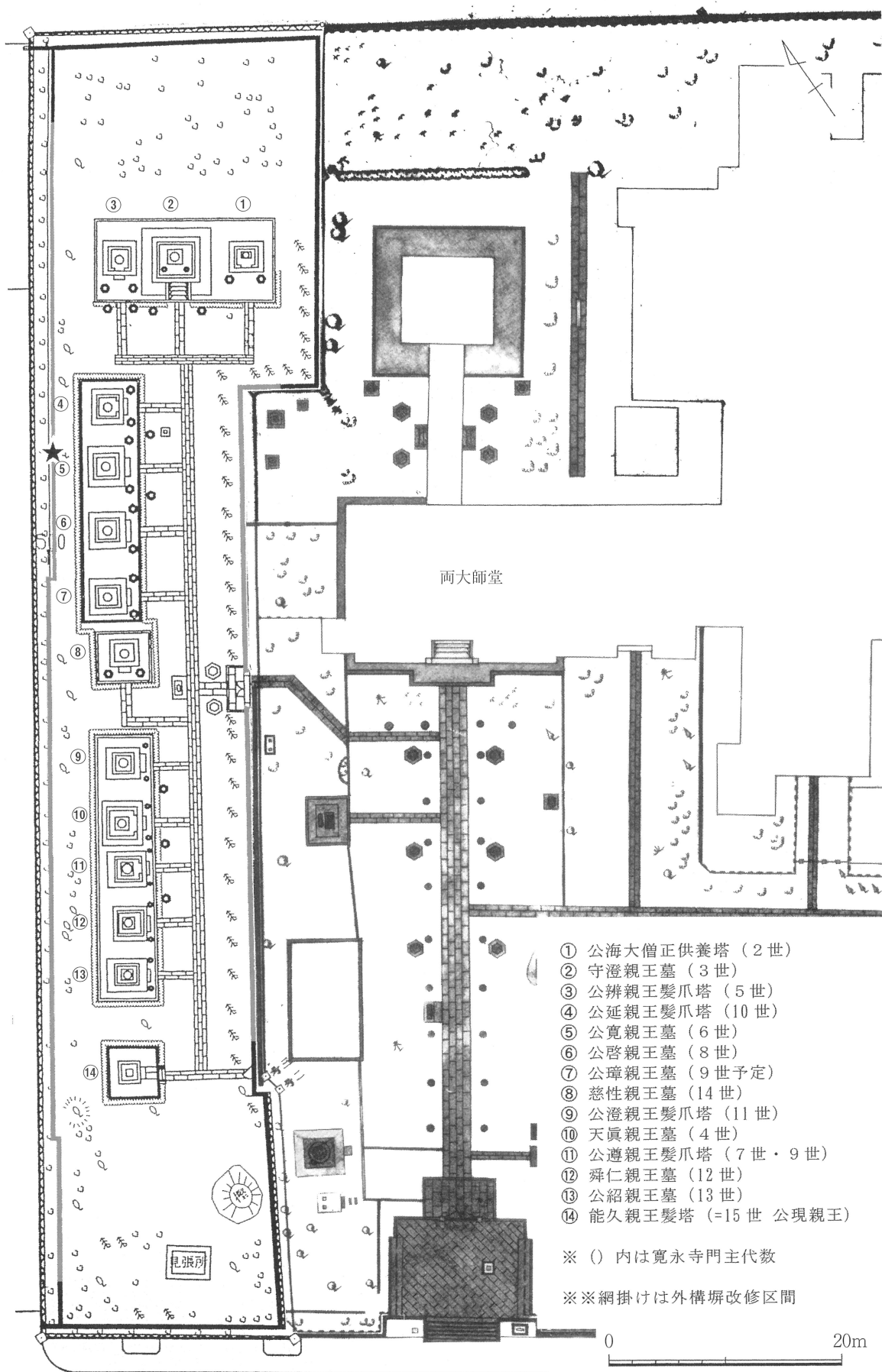
掘削箇所において確認された土層は、表土および既存外構塀の基礎掘方埋土を除いて、基本的には上方から①暗茶褐色土層、②暗黒色土層、③暗黄褐色土層、④明黄褐色土層の順であり、掘削箇所によっては②層や③層は存在していなかった。④層がソフトローム層、③層が漸移層、②層がいわゆる黒ボク層、①層が江戸時代の造成土に相当するものである。今回の掘削箇所においては、一部に③層や④層を切り込む落ち込みが見られたが、掘削箇所が狭小なため、その性格や時期を確定することはできなかった。②層からは縄文土器の小片1点が出土している(第29図★印)。

なお、縄文土器および近世瓦の出土を見たこと、墓地の東辺を画する土手が①層からなっており江戸時代の遺構とみられること、などの点から、工事主体者であった当庁管理部長名で東京都教育委員会教育長に対し遺跡発見届を提出し、当陵墓地は台東区所在の「No.115遺跡」として埋蔵文化財包蔵地に認定された。

(有馬 伸)

註

(1) 東京都教育庁生涯学習部文化課『東京都遺跡地図』、東京都教育委員会、1996年。



第 29 図 上野輪王寺宮墓地 平面図 (1/500)